

ピナ・バウシュとフォーサイスの「作品」は継承可能か

——ダンスの生成過程と「作品」を成立させるための諸要件について——

日本大学 安田 静

<目的>

「振付家」が振付を行わなくなった、と言われて久しい。だが、果たして彼らは活動当初から振付を行っていなかったのだろうか。もし振付家が動き（ダンス）を組み立てることを放棄したならば、ダンスはいかにして生成し、さらに作品として成立してゆくのだろうか。また、作品の継承という観点から見る時、そのような方法で作られた作品は、旧来の枠組み（振付家＝動きを書き、規定するひと、舞踊家＝それを実演する人）に沿って作られた作品と、どう異なっているのか。そもそもそのような作品の継承自体は可能なのか。

本論文ではこれらの問題について考察する。

<方法>

ピナ・バウシュとウィリアム・フォーサイスをとりあげ、「振付」をしていた時期と、しなくなった時期について、「作品」の概念とその継承の問題を考察する。具体的には、世界各地で実際に目にした上演作品を分析対象とし、ブッパタール舞踊団、旧フランクフルト・バレエ団のメンバーへの直接取材から得られた現場の声を参照する。

<結果とその考察>

今日では「振付をしない振付家」の代表格として、バウシュやフォーサイスの名前が必ず挙がるが、両者とも初期には、ダンサーとの共同作業を重視しつつも動きそのものは振付家が決定し、ダンサーに再現させる、という方法で作品を作っていたことを忘れてはならない。

とりわけ、大規模なバレエ団との共同作業で作られた作品や、自らのカンパニーで初演した後に他のバレエ団のレパートリーに繰り込まれた作品については、動きは細部まで固定化されており、再演時にはそれらが順序通りに再現されている。

たとえばパリ・オペラ座で世界初演されたフォーサイスの『イン・ザ・ミドル、サムホワット・エレヴェイテッド』は人気作品として定着しているし、『アーティファクト』もオランダ国立バレエ団のレパートリーに入っている。さらに、バウシュの『春の祭典』さえ、今ではパリ・オペラ座のレパートリーに入り、繰り返し再演されている。

大バレエ団のレパートリーに入ったこのような作品は、本家のカンパニーがほとんど上演しなくなってからも観客が目にすることができ、また、

規定された動きそのものはかなり正確に継承されてゆくことが期待できる。たとえ、レパートリー化や再演時の質的变化に関する問題は避けられないとしても、である。（これについては、既に舞踊学会でパリ・オペラ座のバウシュ振付『春の祭典』の例を取り上げた。）

これに対し、尼崎彬が「編集モデル」と名付け、「現代の最もすぐれた振付家たちは、振付によってではなく編集によって作品を作っている」¹と評価するのが、現在のバウシュやフォーサイスの手法だ。

1つの作品を作り上げるまでに、バウシュが数多くの質問をダンサーに投げかけ、その反応や即興を素材として集めながら、膨大な数の素材の中から取捨選択して作品を構成する、という過程については、一般の観客でもプログラム解説などで繰り返し目にしていることだろう。また、もとはバレエ団内部の教育用に作られたフォーサイスのCD-ROM “Improvisation Technologies”が、簡単な動きやポーズを様々な動きに変形させたり、新しい動きを生成させたりするための基本ツールとなっていること、そしてそのような方法論を身につけたダンサーたちが、フォーサイスの指示に従って次々に即興の動きを生み出していること²もまた、今では広く知られている。

このように、ダンス（動き）の部分の生成過程をほぼまるごとダンサーにゆだね、振付家はもはや作品に用いる要素の選択や構造の設定という「編集」作業のみを担う場合、作品の継承について、いかなる問題が生じるだろうか。

「編集モデル」をとる振付家は即興を重視し、同じことの繰り返しを避けようとする。そうした作品はレパートリー制とは根本的に相容れず、時間の経過に伴い「作品」の再演は困難になる。

その結果、継承できるのは本来、「作品」ではなく方法論や生成システム、ということになるが、バレエ団が解体すれば、システムごと消滅する。フランクフルト・バレエ団がなくなり、ごく小さなカンパニーに規模縮小された今、フォーサイスの作品とスタイルはさしあたりレパートリー制のバレエ団の再演、もしくは彼の方法論を学んだ振付家の作品、たとえば金森穰の「ストリング・ピース」や「SHIKAKU」、鈴木稔「Missing Link」の中で生きながらえてゆくことになるだろう。

- 1 尼ヶ崎彬, 『ダンス・クリティーク』, 勁草書房, 2004年, p. 77.
- 2 YASUDA, Shizuka. “Invisible Turns Visible: Forsythe’s CD-ROM”, *Proceedings S.D.H.S. Minneapolis*, 1996, p. 157-163.

N.B. 本研究の一部は科学研究費補助金（若手研究A, 課題番号14701002）の助成（H14-16年度）による。